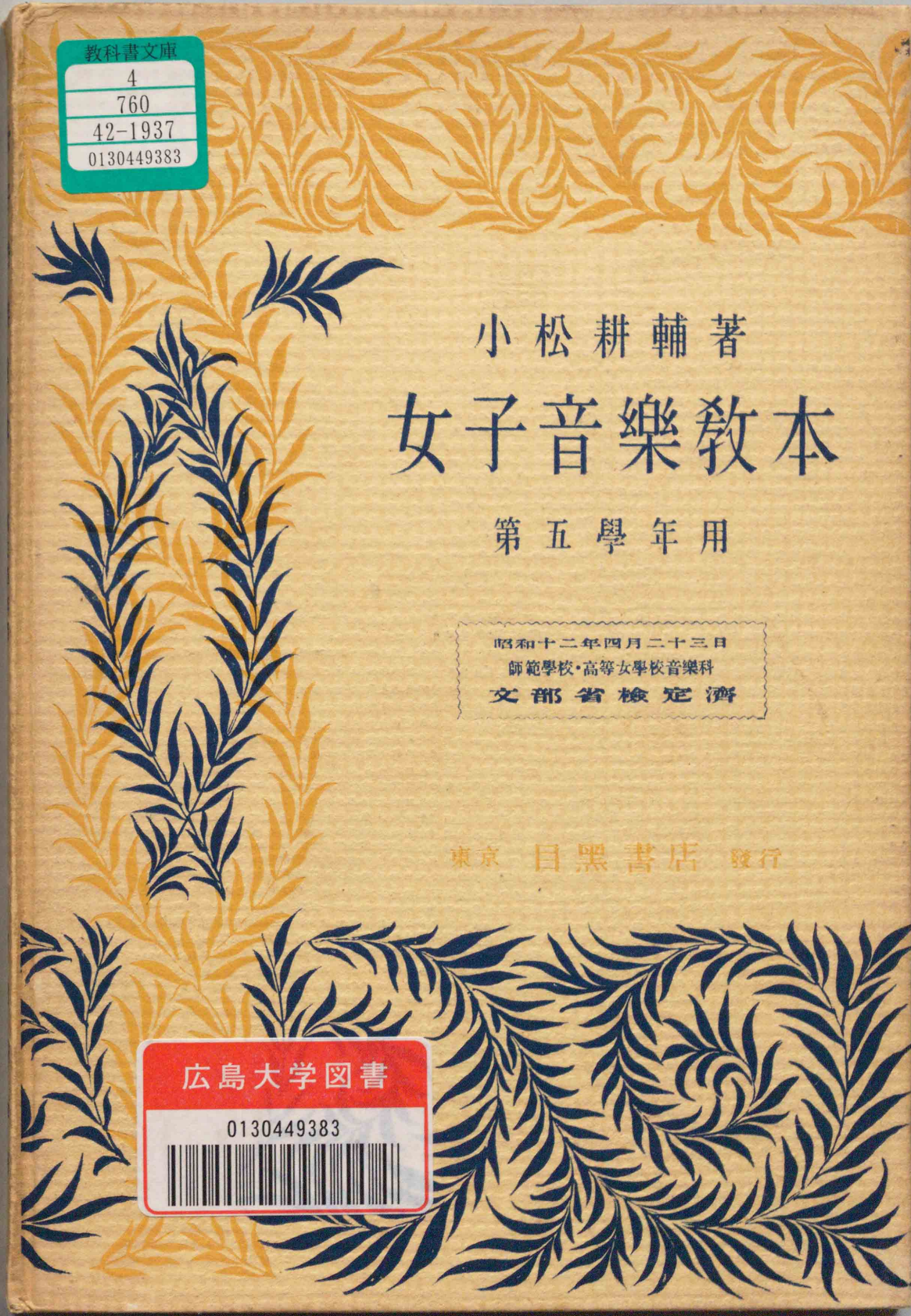
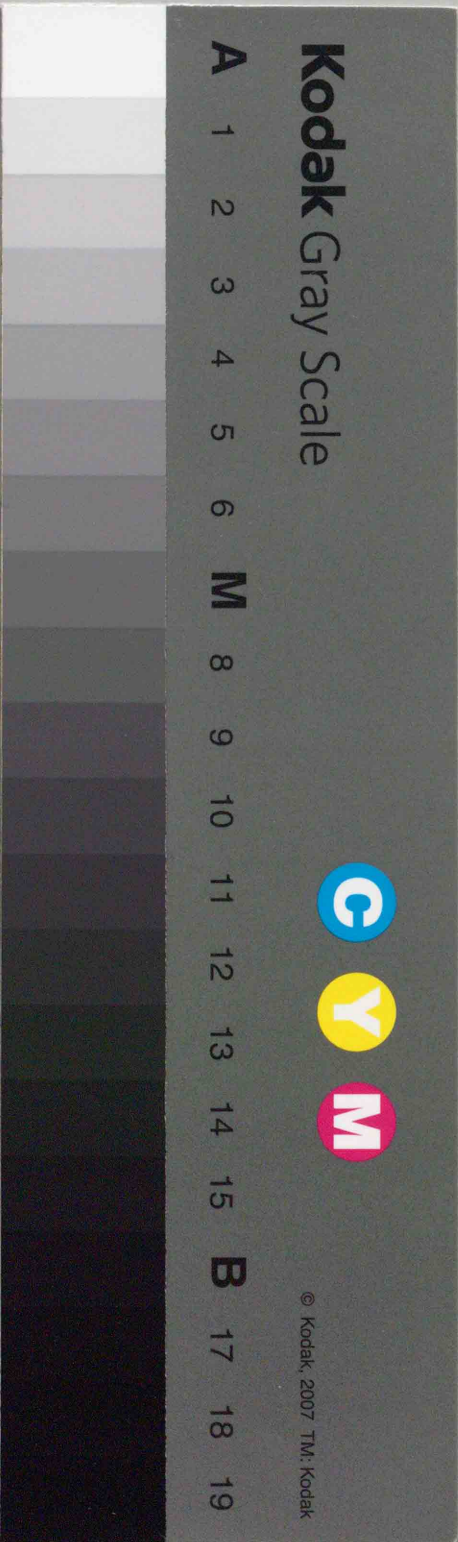
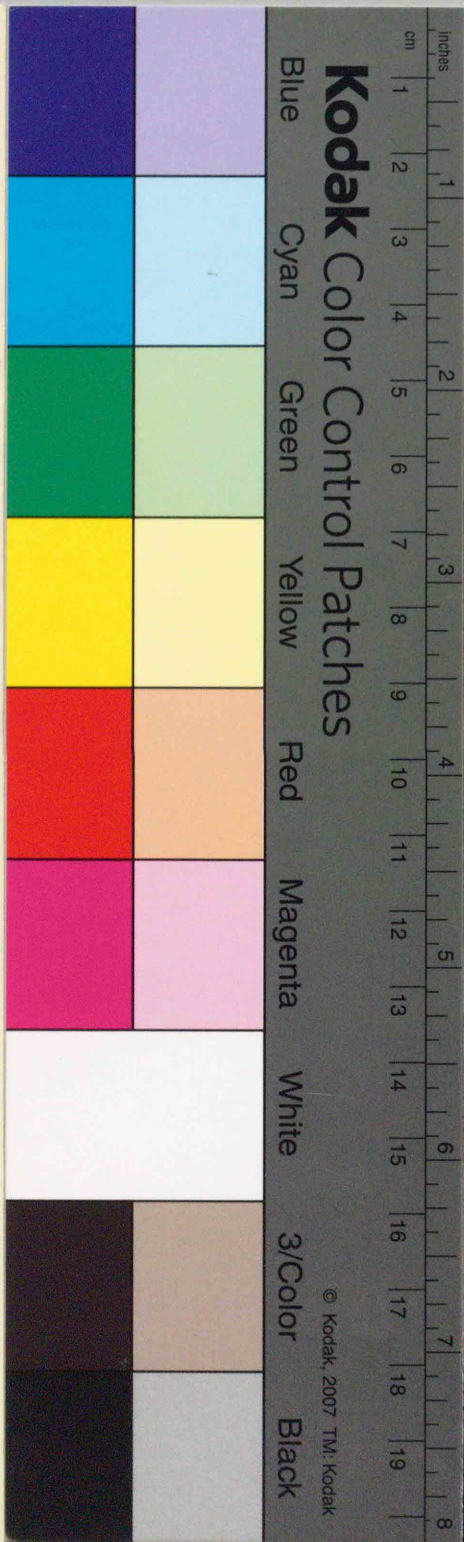


41057

教科書文庫

4
760
42-1937
01304 49383



中央図書館

教科書文庫
4
760
42-1937
0130449383

広島大学図書

0130449383





小松耕輔著

女子音樂教本

第五學年用



広島大学図書

0130449383



東京
目黒書店

緒 言

- 一、本書は高等女學校、女子師範學校音樂科の教科用に充てんがために編纂したものである。
- 二、本書に集録した樂曲は、著者署名以外のものは皆歐米各國の作曲者によつて作られたものである。
- 三、歌曲は教授の都合上、幾分これを加除し他に文部省檢定濟又は認定濟の曲を採録する場合を慮り、卷末に五線紙を添へて其の用に供した。
- 四、樂典は其の初歩を授け、音程練習は階梯的に編纂して卷末に添へた。
- 五、樂式及び音樂史は音樂を正しく理解する上に於て裨益するところ多きを以てこれを卷末に附記した。

昭和十一年九月

著 者

目 次

希望の島	4
春 曉	6
漂流の船	8
牧の子	10
花すみれ	12
森の泉	14
亡き母を憶ふ	16
子守歌	18
朝の歌	22
はまなすの花	26
現人神	28
夜の曲	30
たゆたふ小舟	32
ベニスの船歌	34
水 車	38
舟 歌	40
秋の旅	44
夜の音樂	46
月の光	48
冬は來ぬ	52
ふるさとの庭	54
さらば友よ	58
The song of the l rk	60

希望の島

楽しく

1. ハルカヘダツウミノアナタナミ
2. あめつちにはひかりみちてみそ

カゼシヅカニシイジハナサ
らにほしかかりちからたら

キカヲリハミツアハレコノシマ
ひこころあがるあはれこのしま

ヨノゾミノシマノゾミノシマモ
よのぞみのしまのぞみのしまも

ノミナタリミチヒハオチズハ
のみなたりみちひはおちずは

ナチラヌヨロコビノトコヨベ
なちらぬよろこびのとこよべ

希望の島

一
はるかへだつ海のあなた、
浪風しづかに、四時花さき、
香はみつ、あはれこの島よ。
「望」の島、「望」の島。
ものみな足り満ち、陽は落ちず、
花ちらぬ、喜の蓬萊郷。

二
天地には光明みちて、
御空に星かかり、力たらひ、
靈魂あがる、あはれこの島よ。
「望」の島、「望」の島。
ものみな足り満ち、陽は落ちず、
花散らぬ、喜の蓬萊郷。

小松耕輔

春 曉

のどかに *p*

1. ホノボノート ノハアケテ カスミ
2. とりのこゑの にあふれ よろこ

ターツ トホヤ マ ハルカ ニモ
びーの うた みーつ いくむ れーか

ナガレ ユク カハノア ナタ ミ
うしひ つじ のをわた りて

ヨヤミヨヤヒハノボル
よやみよやひはのぼる

春 曉

小松耕輔

一 ぼのぼのと野はあけて、霞たつ遠山。
はるかにも流れゆく河のあなた、

見よや、見よや、旭はのぼる。

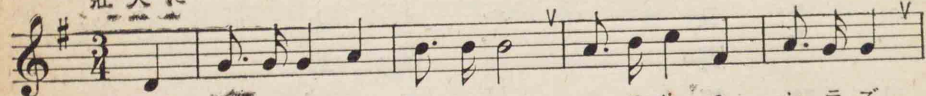
二 とりのこゑ野にあふれ、喜の歌みつ。

幾むれか牛、ひつじ、野をわたりて、

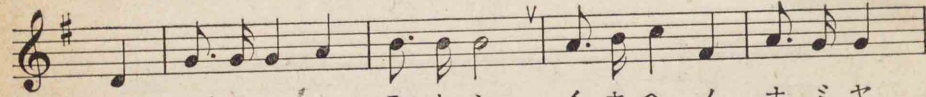
見よや、見よや、旭はのぼる。

漂流の船

壯大に



1. ト マリハ イ ヅ コカ ハ テサ ヘ シ ラズ
 2. い てしは う ららの は なさ く は るび
 3. コ ヨ ヒハ ウ ナ バラ シ ヅ カ ニ ク レテ



ユ ク テ ハ シ ラ ナ ミ イ ホ ヘ ノ ナ ミ ヤ
 わ け し は う す も の か す み の と ば り
 ツ キ サ ヘ キ ヨ ラ ノ ミ ソ ラ ノ サ マ ヤ



フ ル サ ト タ チ イ デ イ ク カ ヲ ウ ミ ノ ヘ
 あ か し つ く ら し つ い く か を う み の ヘ
 ア ケ ナ バ オ ホ ナ ミ マ タ モ ヤ ワ ケ ツ ツ



ト リ サ ヘ ミ ザ ル ヨ ワ レ ラ ガ フ ネ ハ
 と き さ ヘ わ か た ぬ わ れ ら が ふ ね よ
 イ ヅ コ ヲ ト メ ユ ク ワ レ ラ ガ フ ネ ゾ

漂流の船

小
松
耕
輔

一 泊りはいづこか涯さへ知らず、
 ゆくては白波五百重の波や、
 故郷たち出て幾日を海の上、
 鳥さへ見ざるよわれらが船は。

二 出でしは麗の花さく春日、
 わけしは薄絹霞の帷、
 明けしは暮しつ幾日を海の上、
 明かしつ暮しつ幾日か船よ。

三 今宵は海原静かに暮れて、
 月さへ清らのみ空のさまや、
 明けなば大濤また靄わけつゝ、
 いづこをとめゆくわれらが船ぞ。

牧の子

遅く *p*

1. ホ ノ カ ニ ク レ ユ ク
2. し づ か に こ だ ま の

rit. a tempo

コ ダ チ ニ ヒ ビ ク ハ ー ヒ ツ ジ
ひ び き て き え ゆ く ー む ら さ

{ モ ル マ キ ノ コ ノ ム レ ヲ ヨ ブ
{ テ ル ユ フ バ エ ヲ フ ル サ ト ノ
{ き に か す む た に や ま い つ か
{ て る ゆ ふ ぼ し よ ふ る さ と の

p¹ *rit. a tempo* 2.

ツ ノ ブ エ ー ミ ー ネ ニ コ ヒ シ ヤ
く れ ゆ く ー ひ ー と つ こ ひ し や

牧の子

一 ほのかに 暮れゆく
木立に ひびくは
羊守る 牧の子の
群を呼ぶ 角笛。
峰に照る 夕映よ、
ふるさとの 戀しや。

二 しづかに 木魂の
ひびきて 消えゆく
紫に かすむ谷、
山いつか 暮れゆく。
ひとつ照る 夕星よ、
ふるさとの 戀しや。

小
松
清

花 す み れ

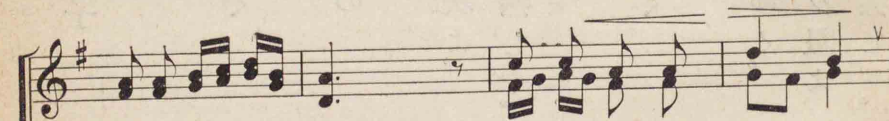
Andantino (♩=132) やさしく
Soprano I.I.



1. ウ ナー ジ ヲ ター レ ヲ グー サ ノ ナー カ
2. た に ま を こ え ひ と り う た ふ



ウ ナー ジ ヲ ター レ ヲ グー サ ノ ナー カ
た に ま を こ え ひ と り う た ふ



ナ ニ オー モー フ カー ナー シ キ ユー メ
う ぐ ひー すー の やー さー し き こー ゑ



ナ ニ オー モー フ カ ナ シー キー ユー メ
う ぐ ひー すー の や さ しー きー こー ゑ



サ メー カー ネ テー カ ハ ナ スー ミ レ
か なー しー きー ゆー ゑ う な だー る る



サー メー カー ネー テー カー ハ ナ ス ミ レ
かー なー しー きー ゆー ゑー う な だ る る

一 うなじをたれ、
悲しき夢さめかねてか、
小草のなか、
花すみれ。何思ふ。

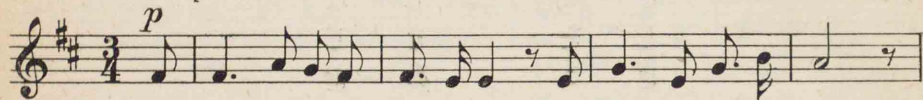
二 谷間をこえ、
やさしき聲、
悲しき故、
ひとり歌ふ鶯の
うなだるゝ。

花 す み れ

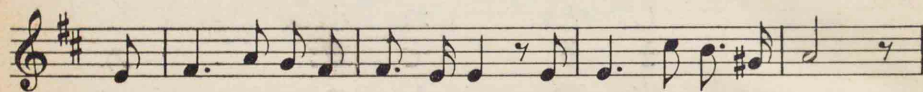
小
松
清

森の泉

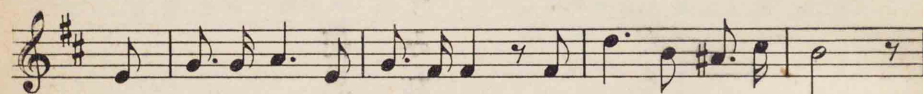
Con espressione



1. ア サ カゼソ ヨフキ キギ ハメザ メ
2. こ の まを も れくる つき の かげ の



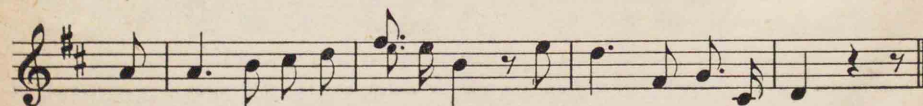
ユ タ カニワ キヅル モリ ノイツ ミ
ほ の かに う つ れる も り の い づ み



キ ヨラニ ツ キセヌ キヨ キイツ ミ
し づか に く れ た る き よ き い づ み



コ ノ ヒモヒ ネモス ウ タ ハン タ メ
み そ ら の み そ の の う た ひ め た ち



コ ト リモオ リキテ ノド ウルホ ス
よ ふ けを ひ そか に の ど う る ほ す

森の泉

一

朝風 そよふき 木々は目ざめ、

ゆたかに 湧き出る

森の泉

清らに つきせぬ清き泉

此の日も 日ねもす

歌はんため

小鳥も下り来て

のどうるほす。

葛原 幽

二

木の間に 洩れ来る 月のかげの

ほのかに うつれる

森の泉

静かに暮れたる 清き泉

御空の 御苑の

歌姫たち、

夜ふけを ひそかに

のどうるほす。

亡き母を憶ふ

Adagio

mf

1. ユフーヒハ シヅミテ タダ ヨフーアヤ
 2. ものみな ねむりぬ かすかにひび

グモヒカリ アセヌイマハヤ
 くはよるの かげかさびしや

ソーラヲアフギテオモフワレヒトーリ
 つきのひかりにいのる われひとり

ヤサーシーキ ハハトハニユキマシヌ
 やさーしーき おもかけをしのびつつ

cresc.

ホシノヒカリ キヨキユフーベ スギニ
 われはいのる よはにひとり みたま

シムカシノ タノシキマトキヲ
 よねむーれ きよけきつーきの

sf *p*

オモヘリバ ナツカシーヤ ア
 ひかりぞ なをまもーる ね

p

アハハ ワガハハ
 むれーよ やすけーく

二

萬象眠りぬ

かすかに響くは夜の風か淋しや。
 月の光に祈るわれ獨り、
 やさしき面影をしのびつゝ
 われは祈る、夜半に獨り。
 みたまよ眠れ、きよけき月の光ぞ
 汝を護る。眠れよやすけく。

一

亡き母を憶ふ

麻上俊延

ゆふ日は沈みて、
 漂ふ彩雲光褪せぬ今はや。
 空を仰ぎて思ふわれ獨り、
 やさしき母とはに逝きましぬ、
 星の光清き夕。
 すぎにし昔の樂しきまとるを憶へば、
 なつかしやあゝ母わが母。

子守歌

Moderato
Soprano I. II.

ねんねんぼうやばーらの は

なとゆーりのはなのほーやのおとこー

Alto

おやすみなさいよいゆめみてー

すみなさいよいゆめみてーおや

おやすみなさいおとなしーく

すみなさいおとなしーく

ねんねんぼうやおかあーさ

(口を閉じて) フン

まとおそらのほしが ついてーますー

おや

おやすみなさいよいゆめみてー

すみなさいよいゆめみてーおひ

おひさまがまたおつきするまで

さ まがまーたおつきするまで

子守歌

一

ねんねん坊や。

薔薇の花と 百合の花の

坊やお床。

おやすみなさい よい夢みて、

おやすみなさい おとなしく。

小
松
清

二

ねんねん坊や。

おかあさまと お空の星が

ついてゐます。

おやすみなさい よい夢みて、

お日さまがまた おつきするまで。

朝の歌

Andante tranquillo (♩=80)

p
あさ-は-きよし つゆのごと すずし
p
あ さ は き よ し す ず し

mf
あたらし-きひはうま-る-
mf
あたらし - き ひはうま-る

いざ-やうたはんこゑ-を-あはせ
い さ や こ ゑ を あ は せ

f *rall.*
あさのうたをさ-やけく
f *rall.*
あさのうたをさ-やけく

mf *a tempo poco animato*
あ-ふ-る-る-よ-ろ-こ-び-を
mf *a tempo poco animato*
あ-ふ-る-る-よ-ろ-こ-び-を

cresc.
そ-ら-に-たかくのぼるひによせて
cresc.
そらにのぼるひによせて-

ritard. e dim.
と-り-と-とも-に-う-た-はん
ritard. e dim.
と-り-と-とも-に-う-た-はん

mf *a tempo*
あさ-は-きよし つゆのごと すずし
mf
あ さ は - き - よ し す ず し

f *poco rit.*
あたらし-きひはうま-る-
f *poco rit.*
あたらし-きひはうま-る-

朝の歌

朝は浄し

露のごとすゞし、

新しき日は生る。

いざや歌はん

聲をあはせ

朝の歌をさやけく。

小松

清

溢るゝよろこびを

空にたかく

のぼる日によせて

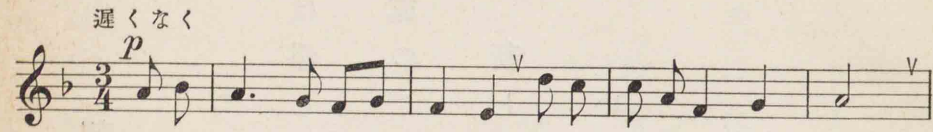
鳥とともに歌はん。

朝は浄し、

露のごとすゞし。

新しき日は生る。

はまなすの花



1. キタ ノ ウミー ベ ノ ハマ ナスノ ハ ナ
2. きた の うみー ベ の はま なすの は な



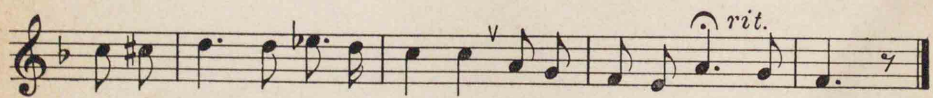
ハル ケ キナギ サ ニ カゼ ニ フー カル ル
はる け き なぎ さ に ひ と り に ほ へ る



ナー ミ マ ニ オチ ユク ユフ ヒ ニ ハー エー テ
いー く へ の な み こ え こ が ね に ひー かー り



クレ ナ キ ユ タ カ ニ マ ロ キ ハ ナ テ ル
は て よ り お と な ふ か ぜ に か は ち る



カ ス カ ニ カ タ ム キ ホ ホ エ ミ ノ ゴ ト
ほ の か に す ぎ ゆ く お も ひ て の ご と

二

北の海邊の はまなすの花

はるけき渚にひとり匂へる。
いくへの波こえこがねに光り
果よりおとなふ風に香は散る、
ほのかに過ぎゆく思ひ出のごと。

一

北の海邊の はまなすの花

はるけき渚に風が吹かるゝ。
波間に落ちゆく夕日に映えて
くれなるゆたかに圓き花照る、
かすかにかたむき、ほゝゑみのごと。

はまなすの花

小
松
清

夜の曲

Andantino (♩=80)

1. トベワガウタヨヤサシキウタヨシ
 2. とべわがうたよやさしきうたよほ

ヅケキヨルノトバリヲヒソカニコエテ
 ほくれなるのをとめのゆめをおとづれ

オヨルノウタヨオヤサシキウタ
 およるのうたよおやさしきうた

ツキハサヤケクカゼハナゴミヌ
 なみはまどろみかぜはなごみぬ

トホキマドベノトモシビシヅカニユラグ
 ゆめのつばさにをとめごかけるはいづこ

ツキハサヤケクカゼハナゴミヌ
 なみはまどろみかぜはなごみぬ

トベワガウタヨルソラコエトベ
 とべわがうたよるのそらこえとべ

ア - ア - - - -
 あ - あ - - - -

夜の曲

小松清

一
 飛べ、わが歌よ、やさしき歌よ、しづけき夜のとばりを、ひそかに越えて。
 お、夜の歌よ、お、やさしき歌。月はさやけく、風はなごみぬ、遠き窓邊のともし火、静にゆらぐ。月はさやけく、風はなごみぬ。飛べ、わが歌、夜の空こえとべ。あ、あ。

二
 飛べ、わが歌よ、やさしき歌よ、頬くれなるの少女の、夢をおとづれ、お、夜の歌よ、お、やさしき歌。波はまどろみ、風はなごみぬ、夢のつばさに少女子、かけるはいづこ。波はまどろみ、風はなごみぬ。飛べ、わが歌、夜の空こえ、飛べ。あ、あ。

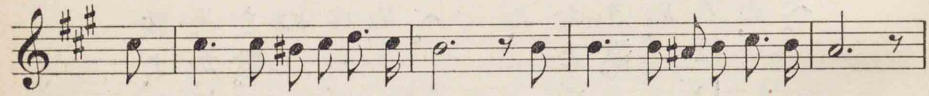
たゆたふ小舟



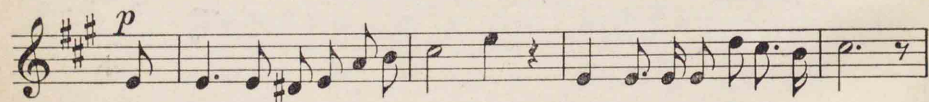
1. タユタフヲブネニ — ミチカラ — タヨリテ
あ — らしふくとも — しらずよ — うれひは



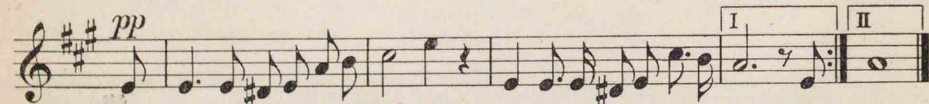
ナミノヘウラウラ — イラバヤ — ネムリニ
あ — らなみさかまき — このみは — しづむも



ミメグミアマネシ — マモラセタマヘナ
と — はなるいのちを — かみこそたまはめ



ヤスラカニネムラナ — タユタフヲブネニ
や — すらかにねむらな — たゆたふをぶねに



ヤスラカニネムラナ — タユタフヲブネニ 2.よ
や — すらかにねむらな — たゆたふをぶね に

夜嵐吹くとも知らずよ愁ひは、
激浪逆捲きこの身は沈むも、
久遠なる命を神こそ賜はめ、
やすらかに眠らな、たゆたふをぶねに。

二

たゆたふ小ぶねに御力たよりて、
波の上うらうら入らばや眠りに、
みめぐみあまねし護らせ給へな、
やすらかに眠らな、たゆたふをぶねに。

一

たゆたふ小舟

近藤朔風

ベニスの船歌

Andante sostenuto

あ あ - - - し
 づ け き う た ご ゑ み づ に ひ - び き
 て - ふ ね は な が る る よ む か
 し さ な が ら の す が た さ ぎ な み は ゆ る
 る - な ぎ さ に そ ひ - て か い を や れ
 ば - こ が ね い ろ の - ゆ ふ - ひ は し づ

み な な い ろ の か げ こ め う た の こ ゑ よ
 も に わ き - て ひ - び き も の な べ て ゆ
 め の ご と う る は し き ひ の を は り を つ ぐ
 る た の し き う た ご ゑ き き て わ が
 ふ ね は し づ - か に な が る
 る し づ か に な が る る

ベニスの船歌

小
松
清

あゝ！

静けき歌聲水にひゞきて

舟は流るゝよ、昔さながらの姿、

さゝなみは揺るゝ。

渚に沿ひて權をやれば

こがね色の夕日は沈み、

七色の影こめ、歌の聲

四方にわきてひゞき、

ものなべて夢のごと

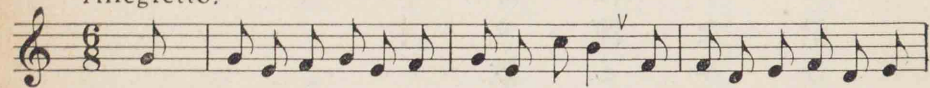
うるはしき日の終を告ぐる。

たのしき歌聲きゝて我が舟は

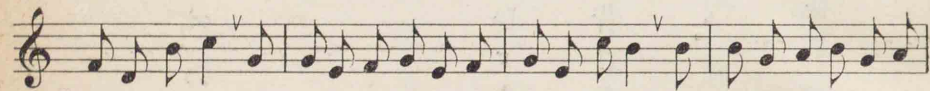
静かに流るゝ、静かに流るゝ。

水 車

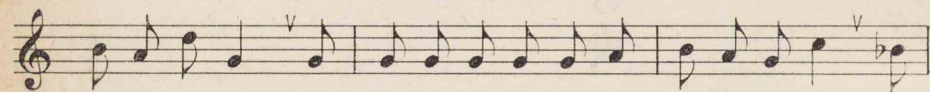
Allegretto.



1. マ ハルヨアレミ ヅゲルマ マ ハルヨアレク
2. ま はるよあれみ づぐるま ま はるよあれく



ルクルト ミ ヅチルオトヒ ビカセテ ヨ ルヒルタダク
るくるとき ねつくおとお もしろく よるひるただく



ルクルト カ スミハコメノ ハアヲク ス
るくるとき たかぜきにほ えたけり こ



ミレハサキテフ -ハマフ タノシサミツ ハルノヒモ タ
ゆきはのにふ りしきる さびしさみつ ふゆのひも た



ユマズタダク ルクルト マ ハルヨアレク ルクルト
ゆまがただく るくるとま はるよあれく るくると

水 車

一

まはるよあれ みづぐるま、
まはるよあれ くるくると。
みづちるおと ひゝかせて、
よるひるただ くるくると。
かすみはこめ のはあをく、
すみれはさき てふはまふ、
たのしさみつ はるのひも、
たゆまずただ くるくると
まはるよあれ くるくると。

二

まはるよあれ みづぐるま、
まはるよあれ くるくると。
まはるよあれ くるくると。
きねつくおと おもしろく、
よるひるただ くるくると。
北風木に 吼えたり、
粉雪は野に ふりしきる、
さびしさみつ ふゆの日も、
たゆまずただ くるくると
まはるよあれ くるくると。

麻 上 俊 延

舟 歌

Scherzando $\text{♩} = 54$

p Alto ♩ Soprano Alto

1. サギリハタチ コーメーサザナミ
2. にさくはなはーほのかに

クダケリニナガレニユラレニ
かをりーながれのいぶきに

p Alto
ニフネハタダヨフーミヅノウ
ーとけてゆるるーはるかに

Soprano Alto
へコスムールーアヤシのユメヨ
かすめーるーこだちのうげよ

p Soprano Alto
ーソラニハカガヤクーシロガネ
ーいづこになげくーやーうぐひす

Meno.

ノホシ 1. やさしのそよかぜ
のこゑ 2. |

p *f*
こだまをはこびてーわがーう

grazioso *rall.*

たーひーびーくえいやらほえいやらほー

mf *cresc.*

えいやらほすずしきほしかげあふげ

f *v*
ばーえいやらほあをきひかりゆ
えいやらほー

f
めとなりてーえいやらほわがの
ーえいやら

ff
るふねゆららゆららー
ほえいやらほえいやら

えいやらほえいやらほ

D.S.
ほ
ながるるーAltoきしる

pp Lento *mf* *pp*
ーああーながるるあ

mf *f* *ff* Resto
あーながーるるー

舟歌

小松清

一 狭霧は立ちこめ さざなみくだけ、
流れにゆられて 舟はただよふ。
水の上こむる あやしの夢よ、
空には輝く しろがねの星。
やさしのそよかぜ こだまを運びて、
わが歌ひびく、 えいやらほ、 えいやらほ。
えいやらほ、
すゞしき星影あふげば、
えいやらほ、
青き光、 夢となりて、
えいやらほ、
わが乗る舟、 ゆらゝ、 ゆらゝ、
えいやらほ、 えいやらほ、
えいやらほ、 流るゝ。

二

岸に咲く花は ほのかにかをり、
流れのいぶきに とけてゆらるゝ。
はるかにかすめる 木立の影よ、
いづこに嘆くや うぐひすの聲。
やさしのそよかぜ こだまを運びて、
わが歌ひびく、 えいやらほ、 えいやらほ。
えいやらほ、
すゞしき星影あふげば、
えいやらほ、
青き光、 夢となりて、
えいやらほ、
わが乗る舟、 ゆらゝ、 ゆらゝ、
えいやらほ、 えいやらほ、
えいやらほ、 流るゝ。
あゝ流るゝ、 あゝ流るゝ。

秋の旅

Andantino

p

1. ウタヒツレ コーエユク アーキノノ ベー
2. おちばふみ こーえゆく あーきのーやまー

mf

ミダレサーク ナーナクーサ ウーツクーシク ータ
くりみのーる はーやしーにもーずなーきてーみ

ノーモニ コガーネノ イナホナーミ ウーツ
わーたすみ ねーみね もみぢいーろ はーゆ

タノシゲーニ ムーレツーツ トーブイーナ ゴー
きこゆるーは しーたゆーく なーがれの ねー

秋の旅

麻上俊延

歌ひつれ越えゆく

落葉踏み越えゆく

秋の野邊。

秋の山。

亂れ咲く七草うつくしく

栗みのる林に百舌鳥啼きて

田の面に黄金の稲穂波打つ。

見渡す峯々紅葉色映ゆ。

楽しげに群れつゝ

聞ゆるは下行く

飛ぶ蟬。

流の音。

夜の音楽

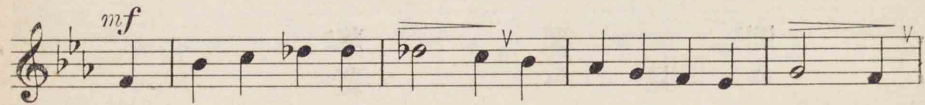
中庸の早さにて



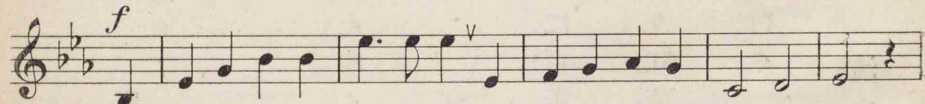
1. ア ラ ハ ニ ナ ラ ブ コー ダ チ ノ オ ク
2. ひ た ひ た よ す る さ ぎ り の な み



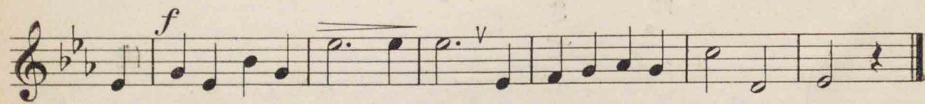
モ ノ サ ビ タ テ ル ガー ク ノ ヤ カ タ
ふ け ゆ く ま ど を し と と こ め て



マ ド ニ ハ ウ ツ ル ト モ シ ビ ノ カ ゲ
つ き か げ あ を く よ は を て ら し ぬ



ア カ ア カ ト ユ ラ ギ イ マ ヨ ハ ク ダ チ ヌ
が く の ね ふ た た び し づ か に あ が り て



ウ チ ョ リ ホ ノ カ ニ モ レ ク ル モ ノ ノ ネ
ひ かり の お と な き う み へ と な が れ ぬ

夜の音楽

一

あらはにならぶ樹立のおく、
ものさびたてる樂のやかた、
窓にはうつる燈火のかけ、
あかあかとゆらぎ、
いま夜は更ちぬ。
うちより、
ほのかにもれくるもののね。

二

ひたひたよするさ霧の浪、
更けゆく窓をしと、籠めて、
月影蒼く夜半をてらしぬ。
樂のねふたたび、
静かにあがりて、
光の、
音なき海へと流れぬ。

小松耕輔

月の光

Andante (♩=76)

p

1. サ ヤ ケ キ ツ キ ノ ヒ カ リ
2. ま し ろ き つ き の ひ か り

— ク モ ナ キ ソ ラ ニ ミ チ テ
— を ぐ ら き こ ず ゑ も り て

— ム ツ ノ ヘ ヒ ト リ ト ビ ユ
— つ ち の ヘ を ぐ さ の う ヘ

— ク ツ バ サ ノ カ ゲ ハ ル ケ シ —
— に か が や く あ や を り な す —

サ ミ シ キ ト リ カ ゲ
さ さ や く を が は よ

イ ヅ ク ニ カ ヘ ル ヤ — ヒ ト ナ
い づ く に な が る る — さ み し

マ — ラ —
の — を —
キ ヨ ル ノ シ ジ マ — ヲ ア
き よ る の ひ ろ の — を つ

マ — ラ —
の — を —
ヲ キ ヒ カ リ ニ ヌ レ テ —
き の ひ か り を の せ て —

月の光

小松清

一 さやけき 月の光

雲なき 空にみちて

水の上 ひとり飛びゆく

翼の影はるけし。

さみしき 鳥影

いづくにかへるや

人なき夜の しじまを

青き光にぬれて。

二 ましろき 月の光

小暗き 梢もりて

土の上 小草の上に

かゝやく 綾織りなす。

さゝやく 小川よ

いづくに 流るゝ

さみしき 夜の曠野を

月の光をのせて。

冬は来ぬ

Moderato

p *mf*

1. ト ホ ヤ マ ノ イ タ ダ キ ハ ヤ ク モ マ シー
 2. い た び さ し を り を り た た く は あ らー

mf *mf*

ロ ニ カ キ ネ ニ オ ク シ モ ノ ア サ ゴー ト シー
 れ か い り ひ は う す れ ゆ き こ とー りー も さー

p *p dolce*

ゲ ク ウ ラ ニ ハ ノ カ ケ ヒー モ ミー ツ ホ ソ リ フ ユー ハー
 む く し も ば し ら ひ ね もー す きー え や ら て ふ ゆー はー

mf *mf*

キーヌ ノ キ ヲ フ ク カ ゼ ニ モ ウ
 きーぬ か ぜ お ち し み そ ら に た

mf

ラ サ ビ シ キ ヒ ビ キ ノ コ モ ル コ コ チ
 か く す め る ほ し さ へ こ ほ る こ こ ち

二 板廂いたびき

入日はうすれゆき、小鳥も寒く、
 霜柱、日ねもす消えやらで 冬は来ぬ。
 風落ちし御空に
 高く澄める星さへ 凍る心地。

一

遠山の頂、早くも眞白に、
 垣根におく霜の朝毎しげく、
 裏庭の笥も 水細り 冬は来ぬ。
 軒を吹く風にも、
 うら淋しき響の こもる心地。

冬は来ぬ

葛原 幽

ふるさとの庭

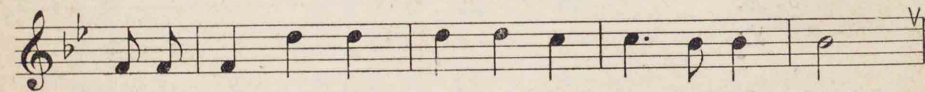
♩ = 120



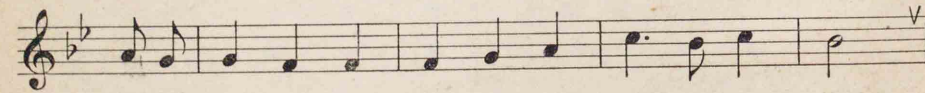
1. フルサトノニハノアヅマヤ
2. いまもなほありやさくはな



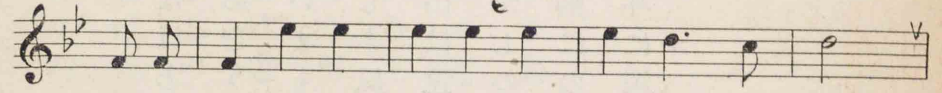
カグハシクバラノハナサキ
みづのうへかげをうつして



ヒモスガラコトリナキツレ
とりのこゑいまもひびくや



カタヘニハヲガハササヤク
かぐはしきかぜをわたりて



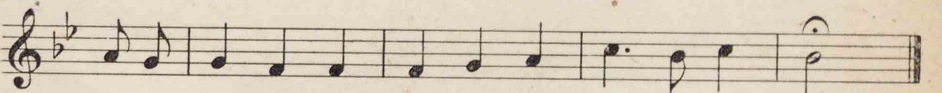
オモヒデハトボシスギシヒ
おもひではとほしすぎしひ



ナツカシノカナタフルサト
なつかしのかなたふるさと



ワガムネニノコルハナノカ
わがむねにのこるはなか



ワガミニニキエヌトリノネ
わがみににきえぬとりのね

ふるさとの庭

一 ふるさとの庭のあづまや
かぐはしく薔薇の花咲き
ひもすがら小鳥鳴きつれ
かたへには小川さゝやく。
思ひ出は遠し過ぎし日
なつかしのかなたふるさと、
わが胸にのこる花の香
わが耳に消えぬ鳥の音。

小
松
清

二 いまもなほありや咲く花
水の上影をうつして。
鳥の聲いまもひびくや
かぐはしき風をわたりて。
思ひ出は遠し過ぎし日
なつかしのかなたふるさと、
わが胸にのこる花の香
わが耳に消えぬ鳥の音。

さらば友よ

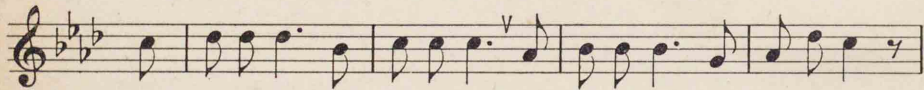
Andante



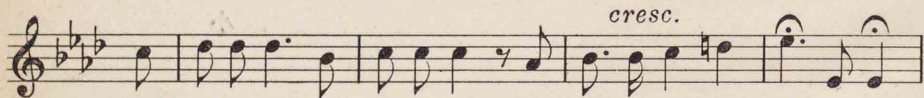
1. ワレラガ マナビ モ キノフト スギケリ
2. のぞみの たかねは けるか にかなたよ



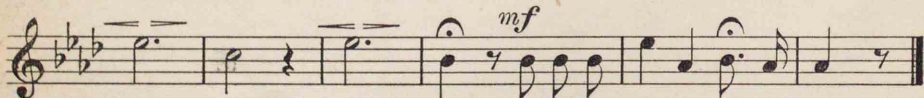
シタシ キトモド チ ウチム レアソビ シ
まなび ををへしも おもへばかどてか



タ ノシキ マ ナビノ ヲ シヘノ ニ ハサヘ
や まぢは これより けはしと きくもの



ケ フハヤ カギリト オモヘバカ ナシヤ
さらばよ ともどち ちからをあはせて



イ ザ イ ザ トモド チワカレン
い ざ い ざ ともどちすすまん

二

望の高峰は遙かに彼方よ、
學を卒へしも思へば門出か、
山路はこれより峻しときくもの、

さらばよ友どち力を協せて、
いざ、いざ、
友どち進まん。

一

われらが學も昨日とすぎけり、
親しき友どちうち群れ遊びし、
樂しき學の教の庭さへ、
今日はやかざりと思へば悲しや。


いざ、いざ、
友どち別れん。

さらば友よ

小松耕輔

The song of the lark

Allegro.
mf



Through blue skies is born the lark's crys-tal song,



That ech - oes the joy of the gol - den dawn,

mp




To heav - en it brings on mel - o - dy's wings

mf



The hymn that the green earth is rais - ing,

mf



The mas - ter of all glad - ly prais - ing,

THE SONG OF THE LARK

Through blue skies is born the lark's crystal song,

That echoes the joy of the golden dawn,

To heaven it brings on melody's wings

The hymn that the green earth is raising,

The master of all gladly praising.

轉調及び諸調の練習

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

Musical score for page 94, measures 1-6. The score consists of six staves in 3/8 time with a key signature of three flats. The first four staves are a single melodic line. The fifth and sixth staves are a piano accompaniment. Dynamics include *mf* and *p*.

95

Musical score for page 95, measures 1-2. The score consists of two systems. The first system has two staves in 2/4 time with a key signature of three flats. The second system has two staves in 2/4 time with a key signature of three flats. Dynamics include *p* and *f*.

Musical score for page 67, measures 1-6. The score consists of six systems, each with two staves in 3/8 time with a key signature of three flats. Dynamics include *mf*, *p*, *f*, and *pp*.

音 樂 史

五 バッハ、ヘンデル、ラモー

これまでイタリーやフランスの音楽によつて生長して来たドイツはバッハとヘンデルの出現によつて一躍ヨーロッパ一流の音楽國となつた。この二人は偶然にも同年に生れ、ひとしく彼等以前の天才達の事業を整理し、完成して驚くべき偉業を樹立したのである。即ちバッハは對位法的の作曲法を大成し、あらゆる宗教樂の遺業を継ぎ、ヘンデルはオラトリオや歌劇の方面に於て成功したのである。

ヨハン・セバスチヤン・バッハは一六八五年ドイツのアイゼナハに生れ、一七五〇年ライプツィヒに歿した。家は代々音楽家であつた。彼の作品は聲樂、器樂ともに澤山あるが、そのおもなるもの



バ ッ ハ

をあげると、聲樂曲では「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」、器樂曲では「平均率洋琴曲」「フーグ付半音階的幻想曲」、其の他澤山のフーグや協奏曲等がある。



バッハは不幸にして晩年明を失したが、トーマス寺院の樂師長に就任し、ひたすら藝術に精進して澤山の名曲を遺した。

ゲオルグ・ヘンデルは一六八五年ドイツのハルレに生れ、一七五

ヘンデル 九年ロンドンに歿した。幼少より音楽を學び、後イタリーに遊學した。ドイツに歸つてハノーヴァ侯樂堂の樂長となり、間もなくロンドンに渡つて非常なる歡迎を受け、遂に同地に移住して一生を送つた。彼は初め歌劇の作曲に熱中したが、後オラトリオの作曲に全力を傾注して澤山の傑作を遺すに至つた。そのおもなるものは「救世主」「アレキサンダー祭」「エヂプトに於けるイスラエル」等である。これと同時代にフランスにはラモーがゐりて音楽理論の研究に没頭し

てゐた。

ジャン・フィリップ・ラモーは一六八三年フランスのディジョンに生れ、一七六四年に歿した。十八歳の時イタリーにゆき、間もなくフランスに歸りオルガニストとして處々に就職した。彼は極めて理智的な人で、立派な科學者であつた。今日の和聲學の基礎は彼によつて確立されたのである。彼は又[クラヴサン曲集]や澤山の歌劇を書いてをる。



ラモー

六 古典奏鳴曲及び交響曲の作家

古典奏鳴曲と交響曲はドイツ人によつて大成された。フランス人は劇場音樂に特別の趣味を有し、純粹の器樂には冷淡であつた。

古典奏鳴曲の形式は大部分ヨハン・セバスチヤン・バッハの第二子カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ(1714—1788)等によつて大成されたものであ

る。對位法的の複音樂は十八世紀の中頃から追々衰へ、單音式音樂が盛んになつて來た。古典奏鳴曲はこの單音式方法によつて書かれたものである。古典奏鳴曲は三部の對照よりなり、速く、緩く、速くの三樂章から出來てをる。又四樂章より成るものもあるが、この場合には二樂章と三樂章との間にメヌエツトかスケルツォを入れる。以上の形式を完成して更に藝術的の生命を注入したものはハイドン、モツァルト、ベートーヴェンであつた。

ドイツの古典音樂はむしろオーストリーの、更に委しいへば、ウィーン的である。ウィーンはドイツとイタリーとの間にあつて、兩方の影響を受け、一方深刻で學者的な北方ドイツ藝術と輕快で、しなやかな南方イタリー藝術とがこの地に於て融合し、新しい一つの藝術を生むに至つたのである。次に述べるハイドン、モツァルト、ベートーヴェンは共にウィーンに生活してあの大事業を成し遂げたのである。

フランツ・ヨゼフ・ハイドンは一七三二年オーストリーの一寒村に生れ、一八〇九年ウィーンに歿した。彼は幼少より音楽の才能を現はし、ウィーンに於て正規の音楽教育を受け、後エステルハー



ジー公の楽長となり、又ロンドン

ハイドン

に旅行して大歓迎を受けた。彼は四重奏曲や交響曲の形式を完成し、又オラトリオ「天地創造」「四季」等の傑作を作り、百二十五の交響曲、澤山の四重奏曲や三重奏曲、及びピアノ奏鳴曲や歌劇等を作った。ハイドンが最も天分を現はしたのは交響



モツァルト

曲と四重奏曲とで、その楽風は極めて素朴で、自然性に富み、且つ剛健である。

ヴォルフガング・アマデウス・モツァルトは一七五六年ザルツブルグに生れ、一七九一年僅に三十五歳でウィーンに歿した。彼は

本當の天才で四歳の時からピアノをひき、六歳の時には父に伴はれて音楽旅行にのぼり、十一歳の時に皇帝の命によつて歌劇を作り、十二歳の時に演奏長に擧げられた。彼は聲樂器樂ともに無数の逸品を遺してゐるが、最も成功したのは歌劇で「フィガロの結婚」「ドン・ジュアン」「魔笛」はその三大傑作である。器樂の方面では四十一の交響曲、二十五のピアノ協奏曲、二十六の絃樂四重奏、其の他澤山の獨奏曲や合奏曲がある。又宗教曲では彼の最後の傑作「鎮魂曲」がある。彼の音楽は實に天才の二字に盡きる。その溫和にして高尚なる感情と、優美典雅なる情緒とが相俟つて天成の美玉の如き樂曲を生んでゐる。

ルドウィヒ・ファン・ベートーヴェンは一七七〇年十二月十六日ドイツのボンといふ小さい町に生れ、父も祖父も音楽家で、その祖先はオランダ人のやうである。幼少から不幸な家庭に生れ十三歳



ベートーヴェン

の時からオルガニストとして働いた。二十二歳の時ボンの選挙侯によつてウィーンに留學を命ぜられ、その後彼は同地に永住し、一八二七年三月二十六日に歿した。彼は中年より次第に耳が遠くなり、晩年には全く聞えなくなつた。音楽者にとつてこれ以上の不幸はない。それにもかゝらず、彼は一生作曲を成しつゞけて不朽の傑作を残した。彼の作曲のうち最も有名なのは九つの交響曲で、中にも第三(英雄交響曲)第六(田園交響曲)第九(合唱交響曲)は最も有名である。英雄交響曲はナポレオンを頌して作曲し、田園交響曲は彼の日常親しんだ田園の印象を描寫し、合唱交響曲は、シルレルの[歡喜に寄す]といふ詩につけた大合唱曲が附いてゐる。宗教樂では[大彌撒]歌劇では[フィデリオ]が有名である。その他澤山のピアノ奏鳴曲や協奏曲、絃樂四重奏曲等がある。彼の作曲は聲樂よりも器樂に傑れたものが多く、ハイドンによつて創められた古典交響曲や奏鳴曲は彼によつて完成され、更にロマン主義音樂への橋渡し

を成してをる。彼は日常寡言、人と交はることを好まず、陰鬱なる性質を懷いて居つたが心中には燃ゆるごとき情熱と愛とをもつてゐた。これが凡て彼の音樂に現はれてをる。彼の音樂は實に人間の精神より靈火を發せしむるものである。

七 グルック以後の歌劇

イタリーに發生した歌劇が全ヨーロッパに及んだことは前章に於て述べたが、その影響によつてフランスにはルリー、ラモアの兩人が出て歌劇が盛んになり、ルリーの歿後はイタリー、フランスの喜歌劇が追々盛んになつた。この時にグルックがオーストリーに生れて歌劇界の一大改革を行つた。

クリストフ・グルックは一七一四年ドイツのエラスバハに生れ、一七八七年ウィーンに歿した。彼はウィーンとミランとに於て音樂を研究し、主としてウィーンとパリとに於て活動した。彼の改革は、在來の歌劇が益々外面的虚飾的となるの

を慨し、詩と音楽とを一層調和せしめ、虚飾を去り、劇的效果を十分ならしめんとするにあつた。彼の傑作は「オルフェオとユリディツェ」「アルツェステ」「イフィゲニー」等である。彼の傳統をついだ作曲者はメユールとケルビーニと



グルツク

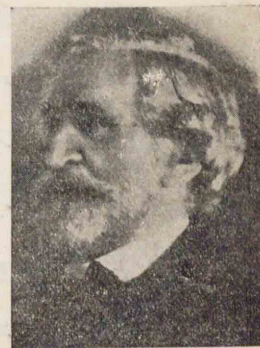
で前者には「ジョゼフ」後者には「水を運ぶ人」「ロドイスカ」等がある。ケルビーニは宗教音楽の方にも鎮魂曲、彌撒等の名曲がある。

イタリー歌劇は十八世紀の末に至つて全く衰微したが十九世紀になつてロッシーニやヴェルディの出現によつて再び復活するに至つた。

デオアキノ・ロッシーニは一七九二年イタリーのペサロに生れ一八六八年パリの近くに於て歿した。彼の傑作は「セヴィリアの理髪師」「オテロ」「ギョーム・テル」等である。

ジュセッペ・ヴェルディは一八一三年イタリーに生れ、一九〇一年八十八歳で歿した。

彼は近代イタリーの生んだ最大なる歌劇作者で其の作品は今日でも世界の至るところに於て盛んに上演されてをる。彼の音楽は頗る美しい旋律に富み、明快なる和聲と相俟つて聲樂、器樂の兩者を巧に驅使し、イタリー歌劇の特徴を遺憾なく發揮してをる。中でも「リゴレット」「トロヴァトオレ」「椿姫」「アイーダ」「オテロ」等は最も傑出したもので、何れの國人にも等しく愛好せられてをる。



ヴェルディ

次に機智と輕妙とを以て四十八の歌劇を作り、眞にパリ人らしい音楽を書いたものはオベール(1782—1871)である。その作品中一般に知られてをるものは「石工」「フラ・ディアボロ」「黒いドミノ」等である。彼は後にパリ音楽學校の校長に任命された。

アンブロアズ・トーマ(1811—1896)はフランスのメッツに生れ、パリ音楽學校に學んで、ローマ大賞を得、

澤山の歌劇を書いた。その主なるものは「カイド」
「ミニヨン」
「ハムレット」等である。

ジアコモ・マイエルベール(1791—1864)はベルリンに生れ、パリとベルリンとに於て活動した。彼はドイツとイタリーとに於て音楽を學び、澤山の歌劇を作つた。その主なる作品は「悪魔ロベール」
「レジュグノー」
「アフリカの女」
「豫言者」等で、その特徴は結構の壯大なることと、卓越せる音楽上の才能と、多様な表現法を有することである。

リヒアルト・ワグナーは十九世紀を通じての最大なるドイツの歌劇作者で、同時に熱烈なる音楽上の革新思想家であつた。彼は一八一三年ライプツィヒに生れ、一八八三年ヴェニスに歿した。ワグナーは一日ベートーヴェンの音楽を聴き非常に感激し、全力をあげてその研究を始めた。これが彼の音楽的生活の第一歩であつた。彼は十八歳の時ライプツィヒ大學に入



ワグナー

り側ら作曲を研究し、間もなく歌劇の作曲を始めた。初めの間は生活上非常なる困難に會つたが、後にはルドウィヒ二世の保護を得、安心して作曲に従事することが出来、澤山の傑作を書いた。晩年にはバイロイトに自作の歌劇を演ずる理想的の劇場を建てた。彼の主なる作品は「飛びゆくオランダ人」
「タンホイザー」
「ローヘングリン」
「トリスタンとイゾルデ」
「名歌手」
「ニーベルングンの指環」四曲、
「バルジファル」等である。彼は在來の歌劇に種々の改革を加へ、詩も自分で作り、作曲上の手法も在來とは非常に變つた方法を取つたので初めのうちは大に攻撃されたが、追々と其の眞價を認められるに至つた。

シャルル・フランソア・グーノー(1818—1893)はパリに生れ、同地の音楽學校に入りローマ大賞を得、イタリーに留學した。彼の名作は「フォースト」と「ロメオとジュリエット」とである。中にも「フォースト」



グーノー

は一千回以上もパリ歌劇場に上演され、世界中の人々に愛好されてをる。

ジュオルジュ・ビゼー(1838—1875)はやはりパリに生れ九歳の時破格の取扱を以てパリ音楽學校に入り十年間在學し、ローマ大賞を得た。彼の名作は「カルメン」である。その他の作曲で有名なものは「真珠取り」「アルルの女」等である。「カルメン」は純然たる寫實歌劇で、彼は率先して日常の出來ごとを歌劇に取入れ見事に成功してをる。彼はこの



曲に於て不朽の名を遺してをる。ビゼー
ジュール・マスネー(1842—1912)も幼にしてパリ音楽學校に入り、ローマ大賞を得てイタリアに留學した。彼の傑作は「マノン」「ヴェルテル」「タイース」等で、その音楽は極めて情熱的で、旋律和聲ともに頗る婉美で、感覺的である。

次にヴェルディ以後のイタリア歌劇作者としてブッチーニとマスカーニとをあげておく。

ジアコモ・ブッチーニ(1858—1927)

はイタリアのルッカに生れミランの音楽學校に學んだ。彼の傑作は「マノン・レスコ」「ボヘミアの女」「トスカ」「胡蝶夫人」等で、いづれもイタリア的の美に満ち、特に旋律の美しいことはヴェルディ以後



ブッチーニ

彼に匹敵するものが無い。

ピエトロ・マスカーニ(1863—)はイタリアに生れミランの音楽學校に學んだ。彼の代表的の歌劇は「カヴァレリア・ルスティカーナ」である。この歌劇によつて彼は一躍歌劇界の寵兒となつたのである。その他「友人フリッツ」「あやめ」「アミカ」等がある。

八 ドイツロマン派の音楽其の他

前章に述べたやうにベートーヴェンは古典音楽の殿將であると同時にロマン派音楽の最初の偉大なる作曲者であつたが、ひきつづいてシュー

バート、ウェーバー、メンデルスゾーン、シューマン、リストが出て、ドイツロマン主義音楽が盛大なる開花期に入った。

フランツ・シューバート (1797—1828) はウィーンの近くのリヒテンタールに小學校長の子として生れ、僅に三十一歳で歿した。彼は聲樂、器樂の兩方面に澤山の作品を遺してゐるが、最も傑れてゐるのは歌謠曲(リート)の作曲で、其の數凡そ六百曲に及んでゐる。彼以前にも歌謠曲



シューバート

の作者は澤山あつたが、その形式も小さく内容に至つては更に貧弱であつた。シューバートに及んで初めて近代的の藝術的歌謠曲が出来たのである。「魔王」「紡車によれるグレーチヘン」「少女の嘆き」「海邊にて」「漂浪人」などは普く人の知るところである。器樂の方面ではハ長調の交響曲、ロ短調交響曲などが最も名高い。

カール・マリア・フォン・ウェーバー (1786—1826) はオ

ルデンベルヒのオイティンで生れた。彼は歌劇の作者として成功し、「自由射手」及び「オベロン」はその傑作である。「自由射手」はドイツの民謡を基として作つたもので、これによつてドイツ人は初めて眞のドイツ國民歌劇を得る



ウェーバー

に至つたのである。彼の歌劇は多分のロマン的風趣を帶び、純ドイツ的性格を以つて書かれてゐる。器樂の方面では澤山の美しいピアノ曲を遺してゐる。

フェリックス・メンデルスゾーン (1809—1847) は富



メンデルスゾーン

裕な銀行家の子としてハンブルグに生れた。彼は聲樂、器樂ともに澤山の名曲を作つてゐるが、オラトリオでは「パウルス」と「エリアス」管絃樂曲としては「ヘブリーデス」序曲「イタリー」交響曲「スコットランド」交響曲「ピアノ曲では「無言

歌謡曲]を初めとして澤山の曲がある。其の他室
樂,歌謡曲,ヴァイオリン曲等に傑れた曲が遺され
てをる。彼の樂風は極めて靜穩で,高尚なる貴族
的趣味と,明確なる表現とを有してをる。

ロバート・シューマン(1810—1856)はツウイッカウ
の書籍商の末子として生れ,初め

法律を學ぶために大學に入學し
たが途中退學して音樂家となつ
た。彼には交響曲を初め室樂,ピ
アノ曲,歌謡曲等澤山の名曲があ
るが,最も傑れたものはピアノ曲



と歌謡曲とである。歌謡曲はシ
ューバート等に比して婉麗の趣を缺いてゐるが,
詩美の豊かな點や伴奏が複雑で音樂的表現に富ん
でをる點は前者よりも優れてをる。

フランツ・リスト(1811—1886)はハンガリーに生れ,
父は音樂家であつた。彼は幼少よりピアノを稽
古し,同地の貴族達の後援によつてウィーンに行
き専心ピアノを研究した。長ずるに及んで世界

第一流のピアニストとなつて諸
國を旅行し,後ワイマールに永住
して作曲に従事した。彼の傑作
は十二の交響樂詩と十九の「ハン
ガリアン・ラプソディ」とである。
彼には其の他澤山のピアノ曲や
宗教的の作曲がある。



リスト

ヨハネス・ブラームス(1833—1897)は以上のドイツ
ロマン派音樂の人々とは異なり,古典音樂の傳統
を尊重し,正確なる古典的手法によつて新たに獨
創的なる作品を公にした。彼はハンブルグに生
れ,マルクゼンに師事した。後年ウィーンに居を



ブラームス

占め同地に於て歿した。彼の作
品は聲樂,器樂の兩方面に亘つて
をるが,そのおもなるものは四つ
の交響曲,「ドイツ鎮魂曲」九つのカ
ンタータ,澤山の室樂,ピアノ曲,歌
謡曲等である。彼は當時の一般
の風潮に反し,嚴重に古典音樂の

形式を守つた作家である。

アントン・ブルックナー(1824—1896)は上オーストリーに生れ、ワグナーの影響を受けて近代音楽を愛好し、力強く幻想的な楽曲を作つた。彼は九つの交響曲、三つの彌撒、男聲合唱、絃樂五重奏等を作つた。

フゴ・ヴォルフ(1860—1903)は初めウィーンの音楽學校に學んだが中途にして退學し、其の後は獨力で勉強した。彼は歌謠曲に於て最も優れた手腕を現はしてをる。メリケの詩につけた五十三の歌謠曲、[ゲーテ歌謠曲集][スペイン歌謠曲集][イタリー歌謠曲集]等いづれも深く詩の内容に味到して旋律に於ても和聲に於てもよく歌詞と一致融合した優れた曲を作つてをる。

グスタフ・マーラー(1860—1911)はボヘミヤに生れ、ウィーンの音楽學校に於て勉強した。彼には九つの交響曲、その他の作曲がある。彼の交響曲は非常に大規模で一種崇高な力強い獨創的な音楽である。

九 ベルリオーズ以後のフランス音楽

エクトール・ベルリオーズ(1803—1869)はフランスのリオンの近くで生れ、パリ音楽學校に入學、ローマ大賞を得てイタリーに留學した。彼は器樂編成法に優れた手腕を有し[器樂編成法及び管絃樂法の理論]といふ名著がある。彼の作品のうち最も有名なものは[イタリーに於けるハロルド][ロメオとジュリエット][ローマの謝肉祭]、歌劇では[ファウストの責罰][カルタゴに於けるトロヤ人]等である。



ベルリオーズ

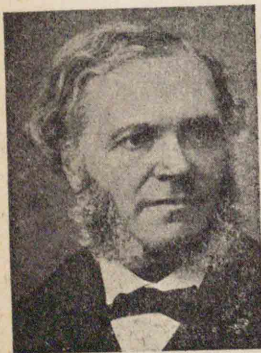
フレデリック・フランソア・ショパン(1810—1849)はワルソーの近くで生れ、父はフランス人、母はポーランド人であつた。彼は幼少よりピアノを學び、九歳の時既に公衆の前で演奏して人を驚かした。十八歳の頃より立派なピアニストとして演奏旅行をした。彼の作曲は殆んどピアノ曲で、この時

代に於ては全く特殊の樂風を有してゐた。その音樂は極めて詩的で、陶酔的で、且つ眩惑するやうな美しさを有してゐる。作品のおもなるものは三つの奏鳴曲、十二のポロネーズ、五十六のマヅルカ、二十五の序曲、十九のノクチュルヌ、二十七の練習曲等である。



ショパン

セザール・フランク (1822—1890) はベルギーのリエージュに生れ、サンサーンスと共にフランス純粹音樂のために大なる功績をあげた人である。彼はパリ音樂學校に學び、初めはオルガニストとして世に立ち、後同音樂學校の教授となつた。彼は在來のソナータ形式に大なる改革をほどこし、和聲轉調、終止法等に獨特の方法を用ひてをる。彼の作品は極めて宗教的で、且つ神祕的で素直である。その作品のうちおもなるもの



フランク

その作品のうちおもなるものをあげると、四つの交響樂詩、三つの交響曲、澤山の室樂、歌劇「サムソンとダリラ」「アスカニオ」「黄色の王女」「アンリ八世」等である。

のはオラトリオ「贖罪」「至福」「ピアノと絃樂との五重奏」「前奏曲とコラールとフーグ」「交響變奏曲」「ニ短調交響曲」「絃樂四重奏、オルガンのためのコラール三曲等である。

カミーユ・サンサーンス (1835—1921) はパリに生れ、極めて早熟の一人で、十二歳の時に既に少年ピアニストとして最初の演奏會を催し、十八歳の時に第一交響曲を書下してをる。



サンサーンス

彼は本質的に古典主義者で、音樂の形式美を熱愛し、明徹、秩序、調和、優美の諸點を具備してをる。

その作品のうちおもなるものをあげると、四つの交響樂詩、三つの交響曲、澤山の室樂、歌劇「サムソンとダリラ」「アスカニオ」「黄色の王女」「アンリ八世」等である。

—○— ロシア及び其の他の國民樂家

十八世紀頃までは音樂國といへばイタリー、フ

ランス、ドイツの三ヶ國だけで、他は皆音樂の野蠻國と見做されてをつたが、十九世紀に入るに及んで、國民主義的傾向が各地に現れ、競うて各自民族の特徴ある音樂を發表するやうになつた。中でもロシアは最も目覺しい活動を初め一躍世界一流の音樂國に列するやうになつた。そしてその先驅をなしたものはグリンカであつた。

グリンカ(1804—1857)はスモレンスクに生れ、ペトログラードに於て音樂を學び、後イタリーに旅行して彼の地の歌劇に刺戟され、自國の國民歌劇を作ることを思立ち「皇帝のための生命」を作つて發表した。この中にはロシアの民謡を入れ極めて特色ある歌劇を創作した。グリンカに次いでクイ、バラキレフ、ボロディン、リムスキー・コルサコフ、ムッソルグスキーの五人の國民樂家が出て、更にこの事業を繼承した。

セザール・クイはペトログラード工科大學の築城學の教授で、歌劇「コーカサスの捕虜」「官吏の子」等を作つた。バラキレフはグリンカの忠言によ

つて音樂を研究し、郷土の民謡、民樂を基として作曲した。その代表的の作品は交響樂詩「ロシア」「タマール」ピアノ曲「イスラメー」等である。ボロディンはペトログラードに生れ、歌劇「イゴール公」を作つて有名になつた。リムスキー・コルサコフ(1844—1908)は五人の國民樂家のうちで最も作品に富み、且つ音樂的才能を有してゐた。



彼はノヴゴロッドに生れ、海軍の學校に入り、其の傍ら音樂を勉強した。作品の主なるものは歌劇「プスコフの娘」「雪娘」「金雞」交響曲組曲「シエラザード」等である。ムッソルグスキー(1839—1881)はプスコフに生れ、士官學校に入り傍ら音樂を研究した。彼は歌劇「ボリス・ゴドノフ」によつて一躍世界的の名聲を博した。

以上の五人の國民樂家の外、折衷的な音樂家としてはペエター・チャイコフスキー(1840—1893)がある。彼は初め大藏省の官吏であつたが、後音樂學

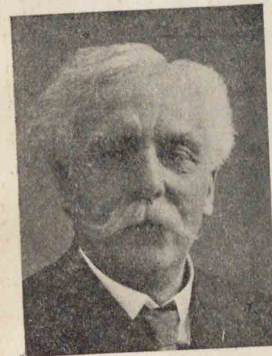
校に入つて音楽者となつた。作品の主なるものは六つの交響曲、四つの組曲〔序曲一八一二年〕歌劇〔ユーゼエヌ・オニエギン〕〔マゼッパ〕等である。

アントン・ドヴォルザーク(1841—1904)はボヘミアの生んだ国民音楽家で、初めプラハの国立劇場の管絃楽員であつた。後ニューヨーク音楽學校に聘せられ、有名な〔新世界より〕といふ交響曲を書いた。その他彼の作曲の主なるものは〔スラヴ舞踏曲〕交響樂詩〔正午の魔女〕歌劇〔ルザルカ〕〔アルミダ〕等である。

エドワード・グリーグ(1843—1907)はスカンディナヴィアの生んだ国民音楽家で、ライプツィヒの音楽學校に於て音楽を學び、歸來北歐民族の音楽建設のために一生をさゝげた。彼の主なる作品は序曲〔秋に〕組曲〔ピール・ギント〕〔ノルウェー舞踏曲〕〔ノルウェーの花嫁の行進曲〕ピアノ協奏曲や奏鳴曲等である。

— 現代の音楽

現代の音楽家として挙げたい人々は澤山あるが、此處には次の六名だけをあげることにする。



ガブリエル・フォーレ(1845—1924)はフランスのアリエージュに生れて、ニールメールの宗教音楽學校に學び、後にパリ音楽學校長に就任した。彼は象徴派詩人の影響を受けて全く新しい独自の

フォーレ 音楽を創作するに至つた。その作品は聲樂器樂の兩方面に亘つてをるが、最も特徴の現はれてゐるものは歌謠曲である。中にもヴェルレーヌの詩につけた五つの歌謠曲や〔よき歌〕などは最も有名である。器樂としてはイ調ピアノ、ヴァイオリン奏鳴曲、ニ短調交響曲、二つの四重奏、歌劇としては〔プロメテ〕〔ペネロープ〕等である。

クロード・ドビュッシー(1862—1918)はパリの近郊に生れ、パリ音楽學校に入學してローマ大賞を得た。彼は象徴派の詩と印象派の繪畫より刺戟を

受けて、在來のロマン派音楽の手法を捨て、感覺と情緒と意象との自然的な結合より生ずる純眞にして簡潔な音楽を求めた。彼の作品の主なるものは歌劇ペレアとメリザンド管絃樂としては「牧神の午後前奏曲」「海」「ノクチュル



ドビュッシー

ヌ」「イベリア」ピアノ曲としては「前奏曲」「サラバンド」「エスタン」「イメージ」その他澤山の美しい歌謡曲がある。

アレキサンダー・スクリアピン(1872—1915)はモスコ



スクリアピン

に生れ、同地の音楽學校のピアノ教授をつとめてゐた。彼の曲は不思議な神祕に満ちたもので、音響と色彩との結合を計り、思想の上からは宗教と藝術の融合を企てた。作品の中のおもなるものは交響樂詩「法悦の詩」「プロメテウス」「神祕」ピアノ曲二十四の前奏曲等である。

アーノルド・シェンベルグ(1874—)はウィーンに生れ、最も革新的なる和聲學者並びに作曲家として有名である。その著「和聲學教科書」はあらゆる新らしい作曲家に影響を及ぼしてをる。作曲のおもなるものは「グレの歌」二つの絃樂四重奏、「室内交響曲」「四つの管絃樂的歌曲」その他澤山のピアノ曲がある。

リヒアルト・シュトラウス(1864—)はミュンヘンに生れ、父は宮廷付きの音楽家であつた。彼は幼少より樂才を現はし、初めは古典音楽を研究したが後ワグナーやリストの音楽を好むやうになつた。彼は交響曲、歌劇の兩方面に優れた作品を有してをる。交響曲の方面では「イ

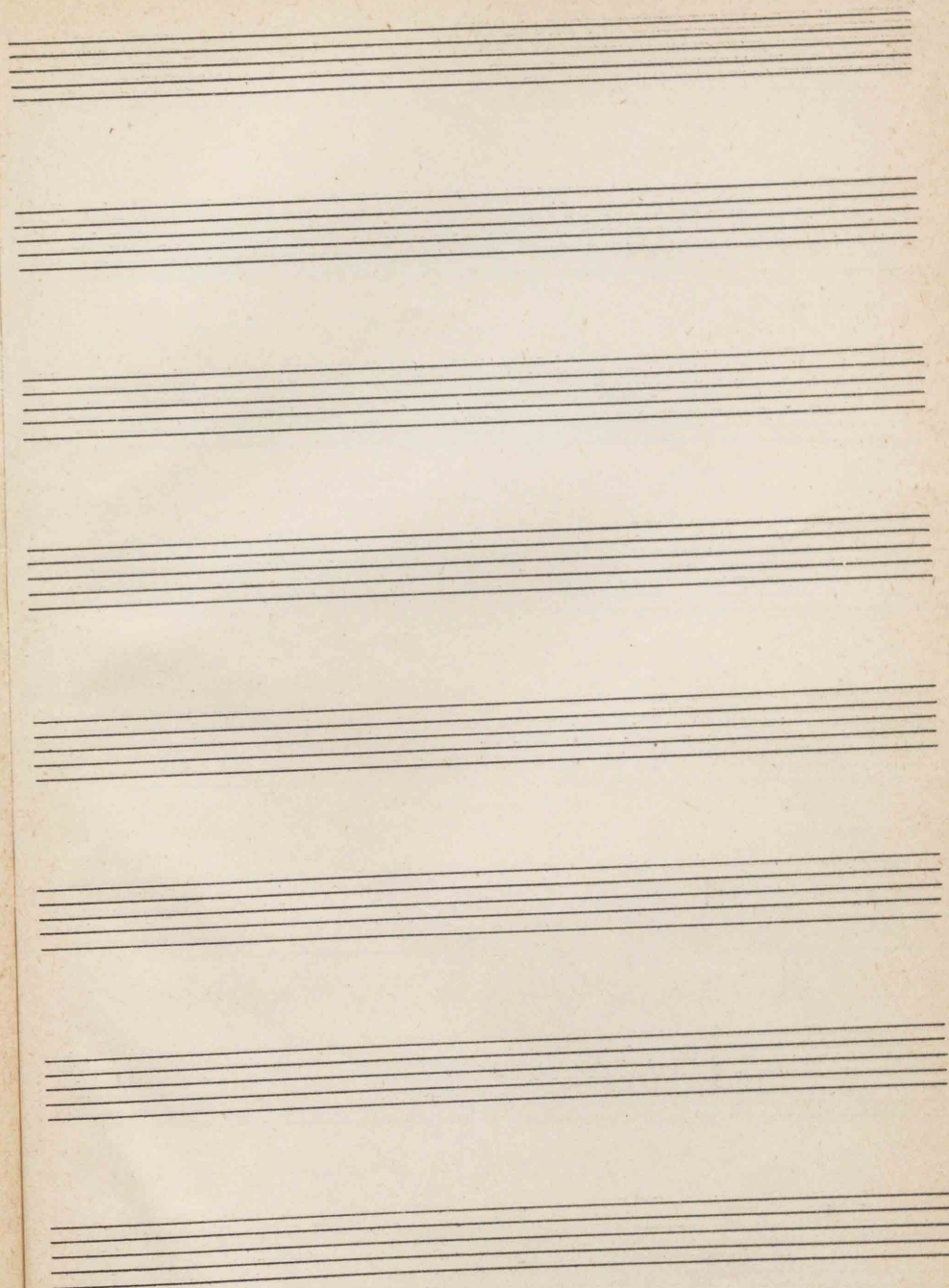


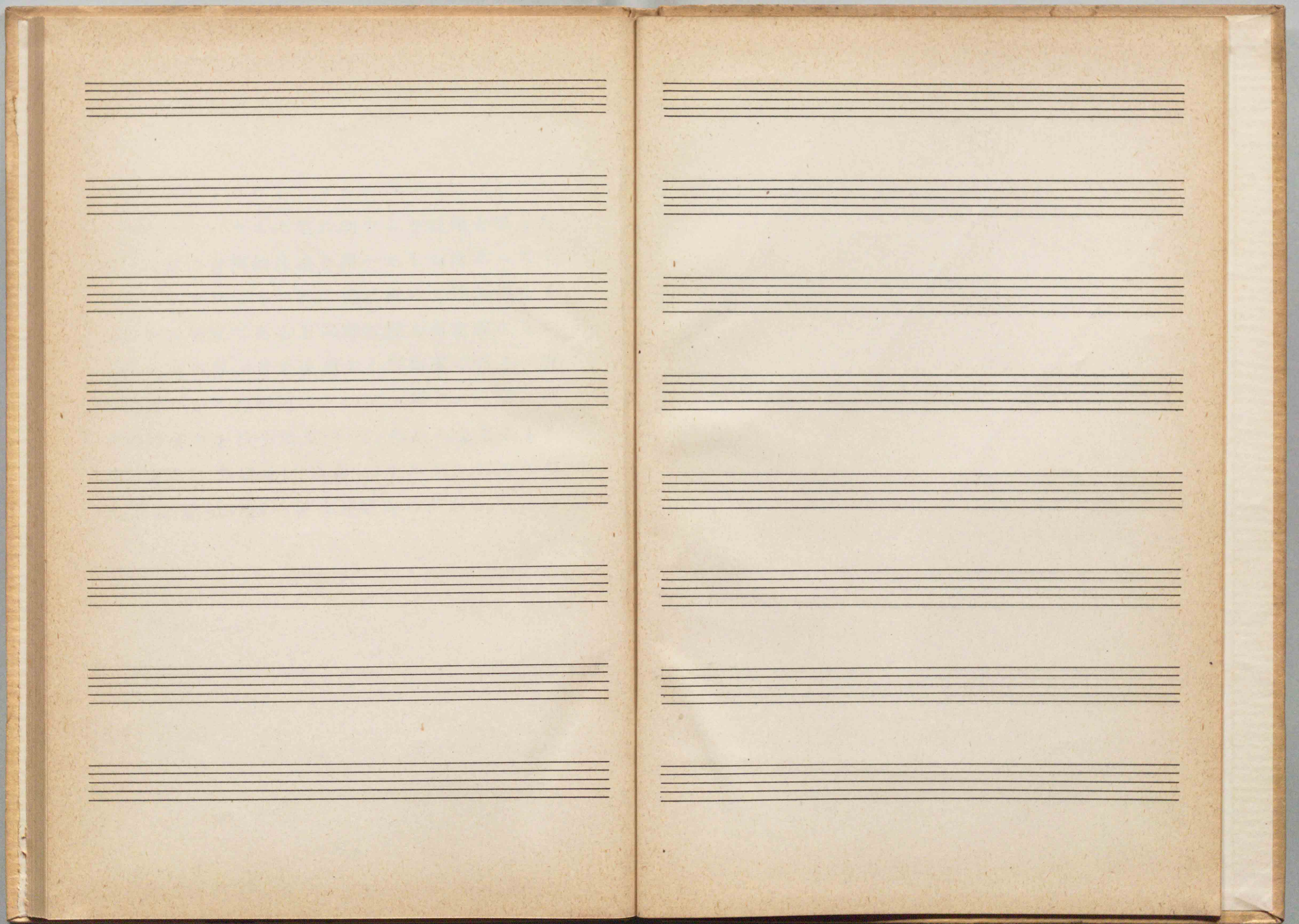
シュトラウス

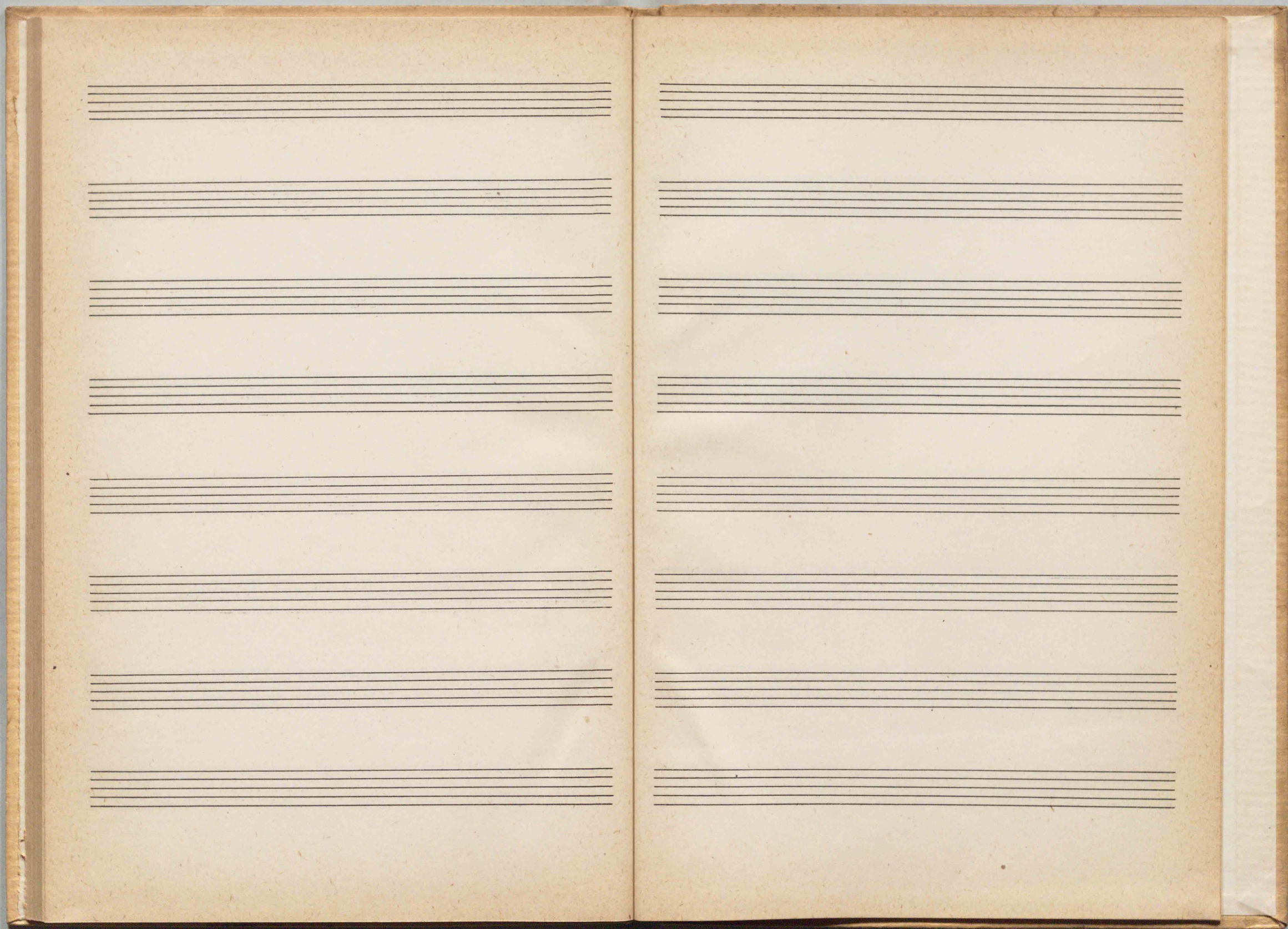
タリーより」「ドン・ファン」「死と淨化」「ティルオイレンシュピーゲル」「ドン・キホテ」「英雄の生涯」「家庭交響曲」等で歌劇方面では「サロメ」「エレクトラ」「薔薇の騎士」等である。

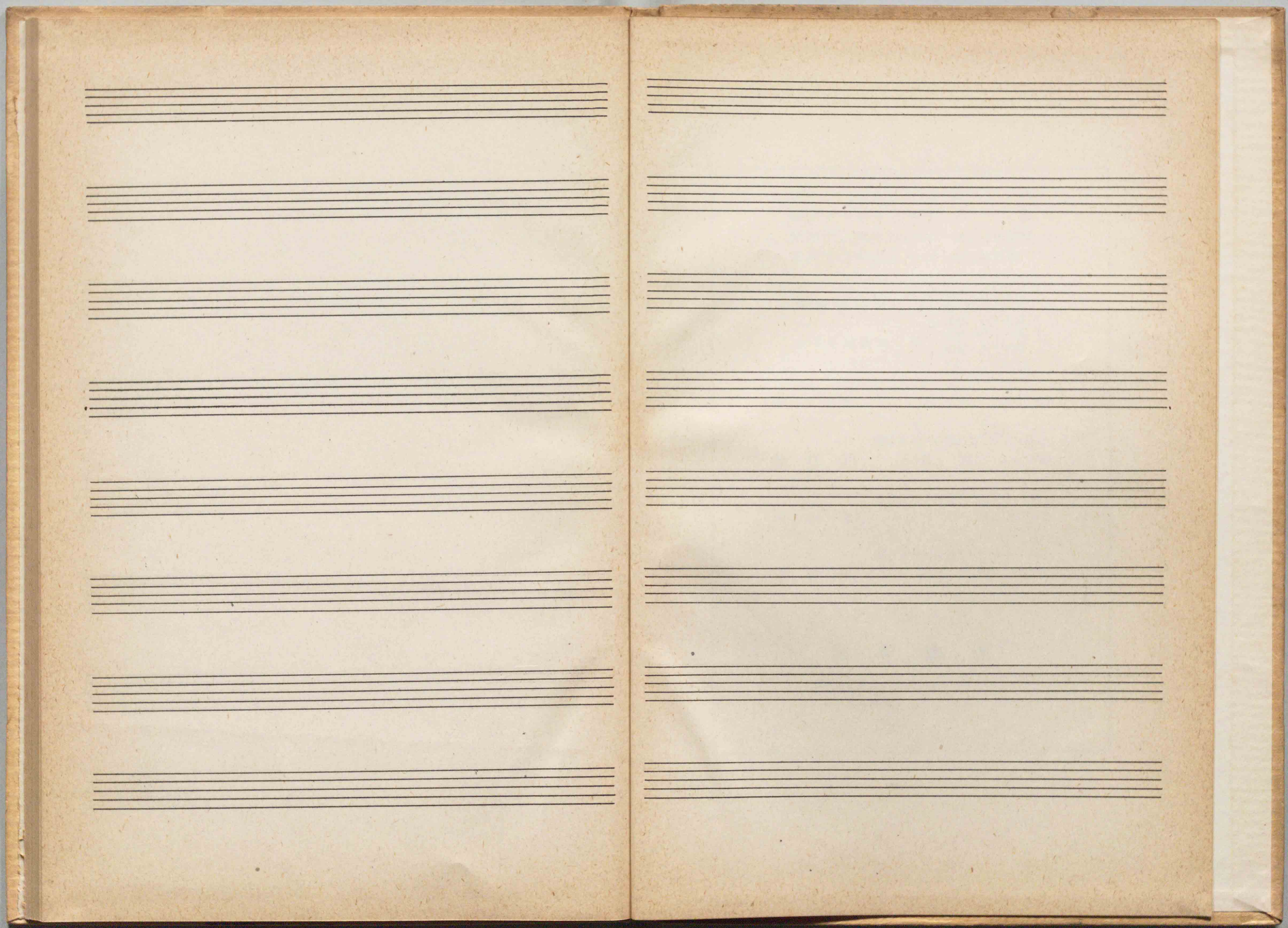
イゴル・ストラヴィンスキー (1882-) はロシアの
オラニエンバウムに生れ、幼少より音楽を學んだ
が、彼に眞の音楽的洗禮を與へたものはリムスキ
ー・コルサコフであつた。彼は極めて獨創的なリ
ズムの音楽家であると同時に、最も有意義に且つ
效果的に不協和音を使用する作曲家である。彼
の曲はロシア舞踊團によつて上演され、一時に世
界的の盛名を得るに至つた。作品の主なるもの
をあげると、舞踊曲「火の鳥」「ペトルシュカ」「春の祭
典」歌劇「鶯」その他交響曲、聲楽曲等がある。

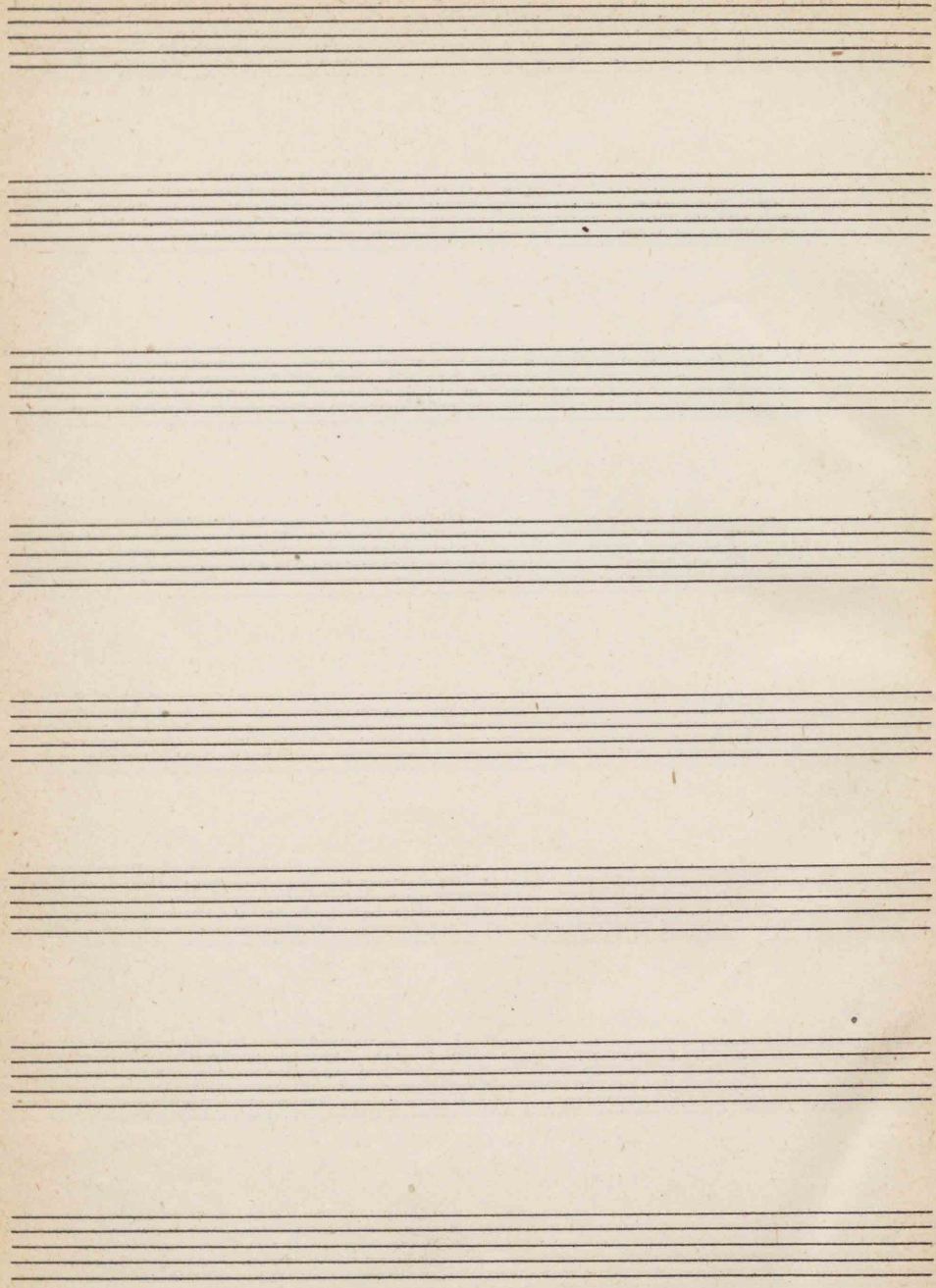
—— 終り ——











昭和十一年十月一日 印刷
 昭和十一年十月五日 發行
 昭和十二年三月廿五日 訂正再版印刷
 昭和十二年四月一日 訂正再版發行

著作權所有 ~~~~~ 女子音樂教本	定	卷一 三十八錢
		卷二 四十二錢
		卷三 三十九錢
		卷四 四十八錢
	價	卷五 五十三錢

著 者 小 松 耕 輔

發 行 者 目 黑 甚
東京市神田區駿河臺三丁目一番地

印 刷 者 白 井 赫 太 郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

印 刷 所 精 興 社
東京市神田區錦町三丁目十一番地

發 行 所

目 黑 書 店

東京市神田區駿河臺三丁目一番地
 振替口座東京二八〇九番

1919.9.27





広島大学図書
0130449383
